

令和 元年 6 月 20 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04452

研究課題名（和文）読み書き指導に関する幼・小連携カリキュラムの開発

研究課題名（英文）A Study on learning of reading and writing for promotion of Connection between Kindergarten and Elementary schools

研究代表者

齋木 久美 (Saiki, Kumi)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：60361284

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：幼児期から学童期にかけては読み書き指導をバランスよく行うことが大切であるが、習得の前提となる認知発達が十分ではない状況で読み書きの指導を行うことで苦手意識が生まれ、かえって就学後の授業に集中できない状況を引き起こしている。そのため「小学校教育との連携・接続の強化」をはかることが重要となる。小学校での書字学習が、就学前の書字とは枠組みが異なるということをふまえ、小学校教師がどのように配慮すれば小学校入学後の読み書きに関する問題を最小にすることができるかといった視点から実践プログラムの開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

就学前に読み書きの前提となる認知発達が十分ではない状況で読み書き指導が行われることが多く、このことにより苦手意識が生じ、就学後の授業に影響を及ぼしている。また生まれつき読み書き能力に障害のある子供や家庭学習が難しい家庭の子供は、読み書きの基本スキルの習得が難しく、小学校入学時に学習困難が生じていることが多い。

幼児期の読み書き指導と小学校の教育と連携・接続させる研究が必要であり、本研究では、小学校教育との連携・接続をふまえ、読みの発達と読みの指導、書きの発達と書きの指導に分けて、保育士や幼稚園の先生のための教本を作成し、就学前機関に活用してもらい、成果を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：If you force children to write without considering their development, they will affect the reading and writing of their elementary school. In fact, it is important to balance reading and writing from infancy to school age. Therefore, we have developed a practical program to help elementary school teachers minimize reading and writing problems after entering elementary school.

研究分野：書写書道教育

キーワード：読み書き 幼小連携 読みの発達 書きの発達

## 1. 研究開始当初の背景

「読むこと」ができるようになるためには、「言葉をたくさん知ること」が重要である。教科書を使用して学習を行う小学校においては、読み書きの能力が学力を形成する基盤となるが、近年、家庭における教育意識の高まりから、学齢期以前に習得されることが多くなっている。しかし、生まれつき読み書き能力に障害のある子どもや、家庭学習が難しい経済的に貧困な家庭あるいは養育能力の低い家庭の子どもは幼児期に読み書きの基本スキルを身につけることが難しく、小学校入学時点ですでに学習困難が生じていることが多い。

しかし、読み書きの指導は、前提となる認知発達が十分ではない状況で無理に覚えさせようとすると、苦手意識を生み、就学後に授業に集中できない状況を生み出すなど小1プロブレムの一因になっていることが推察される。こうした状況の中で、「小学校教育との連携・接続の強化」をはかることが課題となっている。これまでも、幼児期の読み書きの発達研究や指導方法の研究は行われてきたが、それを小学校の教育と連携・接続させるものは少なかった。

## 2. 研究の目的

そこで、幼児期から小学校教育へスムーズに移行する連続的な指導プログラムを開発する研究を実施する必要があったと考えた。特に、小学校での書字学習が、就学前の書字とは枠組みが異なるということを理解し、小学校教師がどのように実践すれば小1プロブレムを最小にすることができるかといった視点から実践プログラムを開発することを本研究の目的とした。

## 3. 研究の方法

幼稚園・保育園と小学校では学習方法に大きな違いがあることは周知のことである。具体的には、遊びが中心の幼稚園・保育園では、保育活動のなかで文字に関心を持ち、自然な形で読み書きの方法を学んでいるが、小学校では机に座って、教科書を用いる中で当該教科に必要な読み書きを学んでいくというように大きく異なる。

こうした保育園・幼稚園と小学校の間にある学習方法の断絶は、家庭で読み書きをあまりしてこなかった学習困難児にはとても大きな影響を与えたと考えられ、授業に参加できなくなる一因ともなっている。

そこで、幼児期から小学校低学年にかけての読み書きの発達と指導方法を体系的に整理し、幼児教育施設や小学校低学年の言葉の指導において活用できる手引書を作成することとした。具体的には、「読みの発達と指導方法」「書きの発達と指導方法」の両側面について体系化して示すこととした。

## 4. 研究成果

### (1)「読み」の発達とそれを支える基礎的能力(細川)

#### 「読み」習得の発達プロセスと語彙知識

子どもが文字を読めないにもかかわらず「読んでいる」ようにふるまう段階は、文字と絵が異なる表現手段であることに気づき始める時期である。この後、文字を単語のまとまりとして読めて、さらに文字とそれに対応する音の結びつきを学習するようになり、文字と音の一致規則を学習する。文字と音の一致規則を習得して間もない子どもたちは、単語や文章の文字を1文字1文字拾いながら読む傾向があるがこういった経験により、文字と音の対応が自動的に行えるようになり、ひらがなを流暢に読むことができるようになる。その結果、単語全体のイメージが明確に形成され、単語を一瞬見ただけでも素早く読めるようになってくる。

読むことができるためには、読むべき単語が語彙として定着していることが前提となる。語彙が増えると、繰り返し使われる文字に注目できるようになり、文字と音の一致規則の習得に

もつながる。語彙の習得は読み習得の基盤となるだけでなく、読みの習熟が語彙を増やすことにもつながり、相互に影響し合いながら発達していくものと考えられる。

#### 音韻処理と視覚認知

音韻処理の中でも特に、ひらがな読みの習得に重要な役割を果たしているのは音韻意識である。一方、文字と音の一致規則をもとに読む段階になると、1文字1文字を正確にとらえて読むことが必要となるが、幼児期における視覚認知の発達には途上の段階にあり、特に左右の弁別は最も困難であることが報告<sup>1)</sup>されているように、左右の区別が難しい文字や、形が似た文字同士は読み誤ることがこの時期には見られることがある。

「読み」の習得のために、幼児期から小学校低学年にかけてできること

読み書きに必要な基礎能力が定着していないと、指導の効果が得られないだけでなく、子どもを文字嫌いにさせてしまうこともある。語彙を豊かにすることが「読み」の習得の大きな基盤となっており、獲得した語彙を意味やその音、構造に意識を向けるような働きかけが、遊びを通じてなされることが望ましい。

音韻意識に対する感受性が弱い子どももあり、そのような子どもたちが文字の読みの習得につまずきを示すことが予想されるが、このようなつまずきは小学校入学後に明らかになる場合も少なくない。文字の読みの習熟が遅れている子どもに対しては、文字の読み書きを直接指導するだけでなく、音韻意識や形態素意識を促すような遊びを、国語の授業の一環として取り入れてみることも1つの方法である。

#### (2) 子どもの発達過程をふまえた「読むこと」の指導のポイント(新井)

##### 読むことの二側面

「読むこと」ができるようになるためには、「言葉をたくさん知ること」が重要である。しかし、自閉症の子どもの中にはかなり専門的な用語も含めて、大人顔負けの知識を持っている子どもいる。このような子どもは難読漢字を「読む」ことができても、「ことば」を的確にとらえて生活のなかで有効に活用することが難しく、「読書」を通して認識力を高めていくということに困難のある子どもも多い。これは、「読むこと」を文脈のなかに位置づけることが難しく、読むことを通じて豊かな想像力へと結び付けていくことが苦手であるということが背景にあると考えられる。

言葉には、自然と理解できるようになる側面と、意識的に覚えることで理解できるようになる側面がある。一般的に前者は「話し言葉」、後者は「書き言葉」と言われている<sup>2)</sup>。すなわち、周囲の大人などからたくさん話しかけられることで自然と獲得する言葉がある一方で、ある一定の認識力の発達を支えにして、大人などから教わることで覚えていく言葉があるということである。

まだ「言葉」というものにほとんど意識を向けていない幼少期の子どもでも、絵本を読んでもらっているうちに、「自然と文字を追うようになった」ことがあり、こうした子どもが幼児期の後半になると、文字に対してかなり興味をもつようになると、形の違いを認識できるようになり、一文字ずつ「読む」ということができるようになっていく。

##### 幼児期から学童期にかけての「読み」の指導のポイント

「たくさん言葉を聞いて、読むことを楽しみながら読書の力を伸ばしていく」という側面と、「文字などに意識的に注目させ、読む力を伸ばしていく」という側面をバランスよく指導することが必要である。「読むこと」の基盤にあるのは、読書に対する興味であり、文字に対する興味である。幼少期からの「読書体験」に大きく影響を受けるもので、文字を読めるようになる以前から、大人がどのように「読んでくれたのか」ということが重要で、読むことの前にある「聞くこと」が基盤になっている。

#### 幼児期からの読書体験を補う小学校の取り組み

ただし日々の授業を工夫しても、貧困家庭等の子どもの社会的経験の不足を完全に補うことはできるものではない。家庭での経験の差を可能な限り大きくしないために、さまざまな方法で社会的な不利を補う取り組みはとても重要である。そこで、図書室の本を各学年のクラスに分散することにした学校があり、図書室にあった本のなかでそれぞれの学年の子どもが興味をもちそうな本を数十冊、教師の側で選び、配架した。こうした取り組みを行っただけで、「学力が向上した」と結論づけられるほど学力を向上させることは容易ではないが、国語の授業改善とともに、こうした取り組みに力をいれていくことが重要である。

### (3) 幼児期における「書くこと」の発達と見取りのポイント（勝二）

#### 「書くこと」の発達

書くことに関わる運動能力として、手指運動が洗練されることが重要で筆記具操作がうまく扱えることが必要になる。筆記具を操作する以前に、幼児期にはその持ち方も変化するが、幼児期における筆記具持ち方の発達については、尾崎(1996)<sup>3)</sup>により詳細な研究がなされている。たとえば、年少児では筆記具を5本の指と手掌で包み込むような持ち方や指と指の間に筆記具を挟むような持ち方が多く見られるが、月齢とともにこれらの握り方は消失していき、年長児になると筆記具を拇指、示指、中指で持つ「3指握り」や「2指握り」へと移行していくというのである。すなわち、年少児の段階では指を動かして筆記具を操作するのではなく、その代わりに手全体や腕、あるいは肩まで動かしながら筆記具操作を行っているのである。このような筆記具操作の発達は自然に獲得されるということではなく、おそらくは筆記具操作を必要とする様々な活動の中で培われているものである。

#### 手先が不器用な子どもたち

手先の操作のような細かな運動やボール投げなどといったダイナミックな運動など、年齢相応の運動や動作ができずに日常生活や学校生活で様々な支障をきたしている子どもたちが一定程度存在する。「発達性協調運動障害(Developmental Coordination Disorder: DCD)」と呼ばれており、一般的には“不器用な”子どもとして扱われることが多い。手先の不器用さがあると、幼児期であれば絵を描く際、思ったように描けず、描こうとする意欲の低下につながるからである。“不器用さ”を「大したことはないもの」と安易に考えず、幼児期から学齢期に至る経過の中で、適切に支援や配慮を行うことが重要である。

#### 幼児期における「書くこと」の見取りのポイント

##### a. 「ひらがな書字」の書字習得に必要な能力

「書くこと」を習得するために必要な能力に、まず一つ目は、自分が思ったとおり正確に運筆することができるということがある。二つ目は、図形を見て模写する能力である。三角形の

模写では、斜め方向への運筆が求められるが、幼児期の子どもたちにとって、斜めに線を引くということは意外と難しいものである。さらに必要な力に、空間位置を把握できる能力があり、空間感覚や方向感覚が正しく認識されていなければ、文字を書くことは難しいのである。

#### b. 運筆能力を評価する方法と支援

幼児期において書字そのものは未習得の段階であると考えれば、書字以前の前書字（Pre-writing）段階における描画や描線の運筆能力を評価することになる。尾崎(2018)<sup>4)</sup>は前書字段階の描線を定量的に評価するために、2歳から6歳までの幼児を対象とする個別検査で、6つの描線課題から構成される（「PWT（Pre-Writing Test）描線テスト」を開発した。これらの課題により測定される運筆能力は手先の器用さと関わっていることを明らかにしており、PWT描線テストの活用により、手先の不器用さを示している子どもの困難さを早期に見取り、就学前の適切な支援につなげていくことが期待できる。

なお手指を使う経験を積ませることは大切であるが、単調な活動を繰り返す行い訓練的なアプローチは子どもたちの支援には不向きであり、また子どもの手の大きさや筆記具の持ち方など子どもの状態に合わせた筆記具を用意することも大切である。さらに様々な能力が運筆操作には影響していることから、支援する側は、子どもの困難さの背景に何が起因しているのか、探っていく必要がある。

#### (4) 「文字を書くこと」に関する指導のポイントと保幼小連携カリキュラム（齋木）

##### 幼児期の「書くこと」の支援における実情と課題

文字の読み書きだけに目を向けるのではなく、幼児の身体的及び認知的発達もふまえ、聞くことや話すことと関連付けた支援や指導が大切である。就学前の無理な書き方により、字形や筆順あるいは鉛筆の持ち方に問題を生じさせ、入学後の書字学習をかえって困難なものにさせていることに留意が必要である。特に筆記用具の操作は環境要因よりも成熟因子の影響が大き<sup>5)</sup>いことから、書字のレディネスを早期に獲得させることはできず、指導は成熟の段階を待つて行うべきである。

##### 「書くこと」を支える手指を使った幼児の活動や遊び

文字の形を捉える技能は文字練習により培われるが、文字を書くという運動技能が、上体を安定させるよい姿勢とも関わっていることや粗大運動から微細運動へと発達することをふまえると、腕を大きく動かしたり手指を使ったりする活動は、書字技能の習得のための大事な活動である。したがって、文字を書くことにおける運動技能を、文字練習のみで習得させようとするのではなく、はさみをつかう、折り紙をする、といった腕、手指を使う遊びを幼児の生活の中で積極的に行うことが望ましい。

こういった活動は、小学校入学以降のさまざまな学習活動の基礎になっており、文字を書くことの技能習得が小学校でのさまざまな学習の土台になっている点にも目を向ける必要がある。

##### 引用文献

- 1) 寺田敦子、辻慶子、池田行伸、2001、子どもの空間認知能力と行為の発達、佐賀大学文化教育学部研究論文集、6(1)、31-42
- 2) 柴田義松、2010、教科教育論、柴田義松教育著作集4、学文社、65
- 3) 尾崎康子、1996、幼児期における筆記具把持の発達の变化、教育心理学研究、44(4)、463-469
- 4) 尾崎康子、2018、知っておきたい気になる子どもの手先の器用さのアセスメント - PWT 描線テストの手引と検査用紙 -、ミネルヴァ書房。
- 5) 尾崎康子、2008、幼児の筆記具操作と描画行動の発達、風間書房.213

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 齋木久美、幼稚園成立期における文字の扱いに関する研究、書写書道教育研究、査読有、33、2019、pp.65-70  
<http://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-1000000065374-00>
2. 勝二博亮、加納茜音、田原敬、ダウン症児の運筆能力、茨城大学教育学部紀要(教育科学)、査読無、67巻、2018、pp.399-407  
<http://hdl.handle.net.10109/13463>
3. 新井英靖、さまざまな生きづらさをかかえる子ども・青年の学び合い-学習困難児の参加と学びにつながる教科指導の方法、SNEジャーナル、査読無、24(1)、2018、pp.9-23  
<http://id.ndl.go.jp/bib/000000101516>

〔学会発表〕(計3件)

1. 新井英靖、言葉の理解と活用に困難を伴う子どもの国語の指導-記憶と知覚の接面を創り出す授業づくり-、全国大学国語教育学会第134回大会、2018
2. 勝二博亮、運筆過程からみた幼児期の書字指導 手先の器用さのアセスメントの開発と実践のあり方、日本特殊教育学会第55回大会自主シンポジウム、2017
3. 細川美由紀他、読みの流暢性と読み能力との関連性の検討：流暢性課題の高成績者と低成績者との比較から、日本特殊教育学会第54回大会ポスター発表、2016

〔図書〕(計3件)

1. 新井英靖他、ミネルヴァ書房、学校福祉とは何か、2018、223
2. 勝二博亮他、ミネルヴァ書房、知っておきたい 気になる子どもの手先の器用さアセスメント、2018、183
3. 新井英靖、齋木久美他、福村出版、子育て・保育の悩みに教育研究者が答える Q&A 楽しく遊んで、子どもを伸ばす、2016、122

〔その他〕

ホームページ等

茨城大学研究拠点 幼少連携カリキュラム開発研究拠点

<http://sne.edu.ibaraki.ac.jp/links/kenkyukyoten/index.html>

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

勝二 博亮 (SHOJI、hiroaki )

所属研究機関名：茨城大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 30302318

新井 英靖 (ARAI、hideyasu )

所属研究機関名：茨城大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 30332547

細川 美由紀 (HOSOKAWA、miyuki )

所属研究機関名：茨城大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 70434537

(2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。